

バハイ聖典翻訳の科学：意味の喪失と創造

尊田望

2003年の大会で「翻訳という芸術」の題名で発表したが、今回はバハイ翻訳の技術の科学的な局面について考察する。バハイ翻訳の中で最も重要であり、最も困難を要するのはバハオラの聖典であるが、この翻訳にあたり、最も頻繁に遭遇する難点は3つある。ひとつは原文の言語と日本語の間に存在する語彙及び文法的構造のギャップ、2番目は原典のアラビア語・ペルシア語の社会文化に加え、翻訳元となる英語の社会文化から日本語社会文化に転送する際に生じるギャップ、3番目はこの時代の神の顕示者により啓示された新しい概念の理解である。この研究では、一般論化できる翻訳法を明確にし、聖典翻訳をより正確かつ効率的に実現させる理論を追求する。また、コンピュータ技術を駆使したバハイ用語「コーパス」の作成及び機械翻訳技術の聖典翻訳適用の是非についても考察する。

In 2003, the author presented on the topic of Art of Translation. In this presentation, in contrast, he attempts to search for a Science of Baha'i Translation, especially translating Baha'u'llah's Writings, which presents the most challenging task. The difficulties seem to arise from three sources: (1) lexical-grammatical gaps between the source (English/Persian/Arabic) and the target (Japanese) languages; (2) socio-cultural-religious gaps created in the process of transferring the ideas from Persian/Arabic to English and finally to Japanese; and (3) 'new' dimensions of spiritual concepts brought forth through the Revelation of Baha'u'llah. This study aims to clarify theories and generalizable methods for translating Baha'i Holy Writings. It also takes up the subject of computer use for this purpose including creating a Baha'i corpus and utilizing machine translation.

バハイの聖典の邦訳は、残念ながら、「わかりにくい」、「難しい」というコメントをしばしば耳にする。当然、これは大変憂うべき問題である。聖典は神の言葉であり、信仰する者はそれを毎朝毎夕唱えることにより聖約を果たし、魂の糧とするからである。ならば、このようなコメントが出てくる原因を追究し早急に対応策を練るべきである。したがって、本稿の研究目的は、聖典翻訳について科学的に考察し、より優れた邦訳を提供することに貢献することである。2003年のバハイ研究会では、筆者は「翻訳の芸術」という題目で発表した。そのときは、翻訳は十人十色という表現に象徴されるように、翻訳者のスタイルや創造性を尊重した翻訳について強調したが、今回は翻訳の科学的局面に焦点を充て、より優れた翻訳をするため普遍的に通用できる方法論やテクニックを明確にすることを目標とする。

翻訳学は、他の科学研究と同様、「基礎研究」と「応用研究」に分かれる。前者は、さらに「描写研究」と「理論研究」に分かれる。描写研究では、翻訳されたもの、翻訳の過程、翻訳の機能にそれぞれ重点を置いた3種類がある。理論研究では、翻訳全般を扱うものと、特定のものを扱うものに分かれ、さらには、特定理論研究では、時間・媒介・地域・テキストの種類・問題にそれぞれ重点を置いたものに分けられる(Toury, 1995, p. 10)。後者の応用研究は、翻訳者の訓練や翻訳補助資料や翻訳批判の分野である。

本研究は、上述の分野がいくつか重複する。まず、19世紀に啓示されたバハオラの書簡という特定の地域、時代、テキストを対象とする。次にバハイ聖典翻訳のプロセスとプロジェクトに関する描写研究であり、同時に、今後のバハイ聖典翻訳の方法論と技術の改善について提案する応用研究でもある。本論では、まず「わかりにくい翻訳」というコメントの意味合いをより明確にして問題を明記する。そして、それぞれの問題点をより詳しく分析し、抽出された課題点に対する解決策を科学的に提示する。

「わかりにくい翻訳」とは

前述では、バハイ聖典は「わかりにくい」という表現を用いたが、考察を進めるにあたり、これの意味するところをまず明確にする必要がある。2003年にバハイ出版局が日本のバハイ共同体を対象に実施したアンケート調査では、バハイの祈りの書に関する感想を問うものであった。この調査結果の質的な分析と、スタディサークルやフィーストやデーブニングなどで聞かれるコメントを基に大まかにまとめると、次のような問題点があげられると思われる。

- * 日本語らしくない
- * 慣れない用語・表現・新しい概念が出てくる
- * 漢字が読めない(発音できない)

しかし、漢字の用法に関しては、直接翻訳と関係がないため、本稿では割愛する。

一様に「翻訳」と言っても、実際には図1に見られるように、原文との関係に応じていくつかの段階に分けられる。このうち、適切な範囲は中間の4つとされる(Newmark, 1982, p.39)

逐語訳—直訳—忠実訳—意識—コミュニカティブ訳—慣用訳—自由訳—脚色
←原文に忠実(外国語化) 対象言語らしい(自国語化)→

図1 翻訳のスペクトラム

逐語訳は一字一句、順番通りに訳していくもので、直訳は原文と対象言語の語順の差異を考慮しながらも基本的には一語ずつ訳していく。忠実訳とは、原文に忠実であり、対象言語としても間違いとは言えないが、「自然さ」に欠ける。他方、慣用訳は自然さに関しては申し分ないが、原文の要素がやや欠けるので忠実さに多少の問題点が残る。自由翻訳は一見、原典とは別の作品ではないかと思えるようなもので、脚色は事実上それ自体独自の作品と

呼べるほどである。意識とコミュニケティブ訳はちょうど中間に位置し、形式をもう少し犠牲にして、忠実訳よりもっと正確な意味の伝達を重視する。コミニカティブ訳はさらに慣用語に近い。

言い換えると、上記のスペクトラムの左側は原文にやや偏った訳で、右側は対象言語に偏っている。したがって翻訳学では、これらをそれぞれ foreignization (外国語化)、domestication (自国語化)と呼んでいる。意識とコミュニケティブ訳はそれぞれをさらに突き詰めたもので、より洗練され、適切になっているものと考えられる。

上記の翻訳スペクトラムでは、中間地点になるべく近づけることが理想であると述べたが、「日本語らしくない」という問題点は、訳が「外国語化」に偏っていることを意味する。それでは、より「自国語化」すれば、事は簡単に片づくはずである。しかし、実際には、それを阻止する要因があり、また外国語化が正当化される理由も存在する。つまり、場合によっては、「読者を外国へ送る」(外国語化)ことも必要であれば、「著者を自国へ戻す」(自国語化)ことも必要なのである (Venuti, 1995, pp.19-30)。これを究明していくことで、「日本語らしくない翻訳」の問題点を解決していくことになる。それにあたり、「同等性」(equivalence)という概念を探ってみる。

同等性

翻訳学では、「同等性」というレベルでの翻訳作業を目標とする。つまり、原文で読むのと訳文で読むのとで、その「効果が同等」であるかどうか (Nida, 1964, p.159) が、その訳の質を決めることになる。しかし、この同等性を語るにあたっては、4つの局面を見る必要がある。ひとつは「意味的同等性」(Bell, 1991, pp. 5-7)、二つ目は「動的同等性」(Nida, 1964, p.159)、3つ目は「形式的同等性」(Hatim & Mason, 1990, p.6)、4つ目は「文体的同等性」(Bell, 1991, pp. 5-7)である。

意味の同等性

「意味の同等性」(semantic equivalence)は自明とも思える概念であるが、現実的には原文と訳文とで意味が100%同等であることは、実現不可能に近い。なぜならば、同一言語内でさえ、「同じ意味」とされる単語のニュアンスは微妙に異なる。たとえば、「家」という言葉にしても、「家」(いえ)と「家」(うち)では響きが違ふし、「住宅」、「家屋」、「建物」、「家族」、「家庭」、「世帯」、「所帯」、「家系」、「一族」など色々な概念で分けられる。カタカナで「ハウス」と言えばどうだろうか。英語でも、house (建て物としての家)、home (家庭)、residence (住居)、dwelling place (やや古風)、housing (住宅)でそれぞれニュアンスが異なる。同じように、「God」及び「religion」はそれぞれ「神」、「宗教」と訳するのが通常であるが、英語と日本語とでは社会文化的なニュアンスがかなり異なることは言うまでもない。したがって、文化や環境の違う外国語から訳す場合、困難はさらに極まり、真の「意味的同等性」は言語学的な意味では不可能と言えるかもしれない。つまり、ここで言う「意味的同等性」はあくまで、いわゆる辞書的な意味で同等を目指しているというだけである。

動的同等性

次に「動的同等性」(dynamic equivalence)であるが、これは、原典の文化や言語や概念が何であれ、読者が関連性を見出せるように訳すことを重視する。聖書の現代訳のように、原典と対象言語の間に時代背景や文化などが大きく異なる場合、忠実な訳をしても関連性が見出されないことも多い。したがって、古代イスラエルの文化的な要素を現代的なものに置き替えて翻訳することで、現代人が関連性を見いだせるようにすることができる。これは前述の「自国語化」のことであり、言語や文化を超えて人の魂に訴えるべき宗教の聖典の訳としては、常に考慮しなくてはならない重要な要素である。4000年前の旧訳聖書、2000年前の新約聖書、1500年前のコーラン、いずれも現代人の心に訴えるには現代人にわかる概念で訳す必要があるが、100-150年前、中近東で啓示されたバハイの聖典でさえ、この動的同等性を怠れば、わかりにくい古文書と聞こえてしまうかもしれない。つまり自然に聞こえ、しかも意味の理解が容易であることを意味する。この動的同等性は、聖書翻訳学の大御所的存在である Nida(1964)が最も強調した要素である。

形状的同等性

形状的同等性(formal equivalence)は、原典の語彙的・文法的形状をなるべく維持し、自国語で最も近いものを探すことを意味する。しかし、単語や句などの語彙のレベルではまだしも、文法的レベルになると、英語と日本語は語順を始め正反対に近いほど対照的であるため、形状的同等性は不可能に近い。特に関係節となると、語順が逆になるだけでなく、複雑な要素を調和させるために、色々入れ替えてみる必要が出てくる。最終的な訳は、原典とかなり形状の異なったものになることが多い。また、その間に、原典にあった形状から来る美しさやリズムが失われてしまうこともある。

たとえば、バハオラの「カルメルの書簡」の出だしは、その典型である。

All glory be to this Day, the Day in which the fragrances of mercy have been wafted over all created things, a Day so blest that past ages and centuries can never hope to rival it, a Day in which the countenance of the Ancient of Days hath turned towards His holy seat.

邦訳は次の通りである。

この日に賛美あれ。この日こそは、慈悲の芳香が全創物の上を漂った日であり、過ぎ去ったいかなる時代も及ぶことのできない日、そして日の老いたる御方の御顔が彼の聖なる座へ向けられた日である。

つまり、日本文では、「日」を修飾する節が先に来る上に、文節の動詞が終わりの方に来るため、節が長くなれば長くなるほど、どのような「日」であるのかが最後まで分からない。英文では、Dayのような名詞を修飾する関係詞節が比較的長くなっても、動詞が早めに出てくるために日本語ほどに苦にならない。さらに、文体的には洒落た、味わいのあるものになる。しかし、これを日本語に訳した場合、形状的な同等性を維持することも難しいし、同じ効果を得ることも困難である。

文体の同等性

文体の同等性(stylistic equivalence)は、形状的同等性の特殊なケースと見ることもできるが、いわゆる「ジャンル」と呼ばれる概念と直結している。本研究の場合は、聖典であるので、口語体ではなく、重厚さと威厳さを有する文語体を用いるのが好ましいとされる。バハイ信教の守護者で、バハオラの聖典を数多く英訳されたショーギ・エフェンデイは、ペルシャ語およびアラビア語から英語に翻訳するにあたり、聖書の訳を参考にされたという。したがって、日本語訳も同じように日本語版の聖書を参考にすることができよう。しかし、このいわゆる古風な文語体の日本語は、残念ながら、「わかりにくい」と言われる要因にもなっている。普段はあまり使わない表現を用いるからである。

では、わかりやすくするために優しい口語体で書いてはどうかという案も過去には出たことがある。実際、「隠されたる言葉」の口語体も提案されている。しかし、これに対するバハイ共同体の反応は、この書簡の性質上、口語体はふさわしくなく、その奥深い意味やニュアンスを伝えるにはやはり文語体が好ましいということであった。その後、「隠されたる言葉」は、文語体の文体を維持したままで、漢字の用法や送り仮名を現代版に更新することで、より読みやすくなっている。

似たような事例として、子供用のお祈りの本を出すにあたり、すでに発行されている文体では子供は読めないであろうという理由で、易しい子供用の日本語で書きなおす案が出たことがある。これに関して、聖典翻訳監修者である日本バハイ全国精神行政会は、現行のままの日本語を使うことを決定した。唯一、子供のための祈りの本として考慮したことは、振り仮名を豊富に使うことであった。この決定の背後にあるのは、バハイ聖典をより簡易な日常的英語に直してよいかという問い合わせに対して、万国正義院は、「解説するためにそのような言語を用いることはできるが、それを聖典として扱うことは適切でない」と答えているからである(From a letter written on behalf of the Universal House of Justice to the Spiritual Assembly of Guadeloupe, May 13, 1986)。

さらに、バハイ聖典は原語がペルシャ語やアラビア語であるため、その文体やコーランの文体が反映されることは避けられない。たとえば、「神 - - わが魂が神に捧げられんことを - -」のように、文章の途中に神への賛美を表す表現を入れることは、日本語では通常しないことである。今のところ、バハイ翻訳の実践では、形状的に省略することはしていない。したがって、いわゆる「外国語化」の現象が生じる。バハイ聖典がどうしても外国のものと感じられてしまう要因のひとつにはなっているようである。しかし、日本の文化にすっかりなじんでしまっている仏教の念仏や漢文的な謳いはどうであろう。通常の会話や書きもので使う文体ではないが、適切な場となれば心に強く訴える効果を有する。内奥にある深い意味に専念すれば、こういった表面的な形式の問題はやがて副次的になり、おそらくは日本の言語文化の自然な一部になってしまうのではないだろうか。

いずれにせよ、文体から生じる「困難」に対する対処法は、日本語の場合、振り仮名などをつける手段を除いて、基本的には読者が慣れる、努力するという教育的アプローチが必要とされるようである。実際、ショーギ・エフェンデイは、「隠されたる言葉」をアラビア語からペルシャ語へ(またはその逆)の翻訳を禁止され、読む者が両方の言語に慣れ親しむことを奨励されたほどである。「隠されたる言葉」は原典がアラビア編とペルシャ編からなっており、それぞれの言語で書かれている。この二つの言語は、文字こそアラビア文字を共通としているが、

言語族的にはそれぞれ異なり(前者がアフリカ・アジア語族で後者がインド・ヨーロッパ語族)、日本語と中国語の関係に似ている。それほど異なる言語間での翻訳を禁止されたのは、ショーギ・エフェンデイが設定された標準がいかに高かったかを物語っている。

同等性を実現する難しさ

形状や文体は、前述のスペクトラムの左の部分に関連し、意味的・動的同等性は右の部分に関連する。この2極の同等性は常に相反する要素を持つが、バランスを保たなくてはならない。聖書翻訳研究家 Nida(1964)は、動的同等性を強調し、聖書の現地の読者に分かりやすくするために慣用語の多用を奨励したが、Venuti(1995)は異なる文化は異なる価値を持つので、翻訳されたテキストは必ず異なる効果が生じるとした(p.31-33)。

このように、多少の差異はあるが、時代を通じて、翻訳学の専門家たちは、上述の許容範囲内に収まる翻訳を提唱してきていることはちがいない。Dolet(1540) から Chapman(1598), Campbell & Tytler(1790), Arnold(1863), Nida(1964)に至るまで、みな、逐語訳と自由訳の両極端を避け、原文の精神を伝え、原文の文体とマナーを維持し、原文の効力を伝え、対象言語としての自然さを目指すようにしている。

新しい概念と社会文化的背景の相違

バハイ聖典翻訳に関するもうひとつのチャレンジは、バハイの聖典には新しい概念、難しい概念が多く出てくることである。これには、2つの局面が考えられる。ひとつは、「累進的啓示」という教えに表されるように、バハオラの啓示は、神の教えの最新の段階であり、それだけで新しく学ぶことがあるのである。もうひとつは、バハオラの教えが、ペルシャ語、アラビア語、イスラム教、中近東の社会文化という背景を持っていることである。これらはどれを取っても、日本人にとっては馴染みの薄いものである。

バハオラは、キリストは教えを伝えるにあたり寓話を頻繁に用いたが、ご自身は直接にメッセージを伝えたとおっしゃる(Summons to the Lord of Hosts, paragraph 120)。それにあたって、概念を伝えるために、これまでには出てきていない新しい語句表現が多いことも事実である。たとえば「神の顕示者」、「累進的啓示」、「神の一体性」、「宗教の一体性」、「人類の一体性」などである。バハオラは、不可知なる神と神の創造物である人間との仲介役となり、神の意志を説き伝える人物を「預言者」や「使者」や「使徒」といった従来の表現ではなく、「顕示者」と呼んだ。さらに、バハオラは、これらの人物は、決して神ご自身ではなく、神の本質そのものとは区別して、彼らが神の属性を表す存在として説明している。

キリストは、同じ概念を説明するために、「父と息子」(Father and Son)という表現を用いた。息子は、父の言うことを繰り返し、父の意思をなさんとするが、父その人ではない。これが、いつの間にか誤解され、キリストは神の直接の息子になり、それが、他の預言者よりもキリストが偉大である、全く別の部類の存在であるという教義の元となってしまった。また、カトリック教で説く「父と息子と精霊」の三位一体説も同様の解釈によるものである。

ここで言わんとすることは、より高度な概念を解くためには、それなりに新しい用語が必要と

なってくることで、訳語も、新しい語を創造しなくてはならない。

もうひとつの課題は社会文化的なもので、イスラム教、中近東、ペルシャ語・アラビア語という地理的・言語文化的要素に影響を受けるものである。そのような文化的差異を生じるケースとして挙げられるのはまず生態系的なものがあげられる。風・平原・丘などの地理的環境で、バハイの聖典では、舞台背景が中近東であるため、当然ながら、イラン、イラク、トルコ、イスラエルなどの地理的名称や気候的現象が出てくる。(しかし、時代的背景から、これについてはさほど大きな問題は生じていないようである。)

次は物質的なもので、食べ物・服・家屋・交通手段などがあげられる。たとえば、バブ、バハオラ、アブドル・バハは頭にターバンを巻いておられた。また、中近東の文化ではターバンの高さでその人の地位がわかるという背景があった。また、当時は馬やロバに乗って移動しており、隊商宿、アッカの要塞都市、兵舎、石畳、石造りの家など、中近東特有の物理的環境が出てくる。

ジェスチャーと習慣も同様で、中近東の挨拶では男性同士の抱擁や頬への接吻などは通常である。また、手を取ることもある。この点は、日本の習慣とは大きく異なる。しかし、日本と同様、地位の差によるへりくだりや、歩く時の位置、座る場所などについての決まりがあるし、大衆浴場を使うという習慣もあるので、その意味では分かりやすい。

バハイの聖典では、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の流れで、この3つの宗教とその聖典に関する言及が非常に多い。事実上、バハオラの時代には、仏教徒の信者がいなかったの、書簡では、これに関する言及が一切ない。神道・仏教・儒教の背景しかない日本の読者にとっては、その意味では大いなるチャレンジである。しかし、過去の宗教をもっと学ぶことは、バハイ教を理解するためにも役立つので、読者が知識と理解を深めるといって課題と捉えることもできよう。

文化的代用

Cultural transposition (Hervey, et al., 1995, p.20) は、exoticism/cultural borrowing(原語の言語的・文化的特徴を借用)など、文化的な要素の強い対象言語のテキストを目標言語に文化的な置き換える手法であるが、calque(原語の慣用表現や固定表現の直訳)、communicative translation(固定表現などは対象言語で既に存在するもので置き換える)、communicative transplantation(文化的借用とは逆の極端で、原語の姿はほとんど消えてしまう、いわゆる脚色)から構成される。

たとえば、バハイ聖典でいえば、「辛子の種ほども」、「汝の努力という腰巻きをしっかりと結べ」、「神の教えの夜明けの地」、「真理の太陽」、「神の一体性の幕屋」などはすべて直訳に近いが、これは精神的概念を伝えるためにバハオラが用いた比喻である。

逆に、直訳をせず、原語で文化的に特有なものを対象言語でも文化的に特有なものに置き換える方法がある(=文化的代用)。命題的には意味が異なるが、読者に与える影響力は同

等とみなされる。たとえば、聖書では「人はパンのみにて生きるに非ず」というキリストの言葉があるが、これを「人は米だけで生きるのではない」と言い換えるのに等しい。ここで重要なのは「パン」か「米」かではなく、「主食」である食べ物だからである。その食べ物だけで生きているのではない、とキリストは言っているのである。

さらに、借用語で済ませる場合もある。「サドラトル・モンタハ」などは英語自体もアラビア語から借用語として用いている。書簡の題名も英語では借用語であることが多い (Kitab-i-Aqdas, Kitab-i-Iqan など)。しかし、和訳では日本語との混合語である(「アグダスの書」、「イガンの書」)。これは、原文の音の響きを少し残しながらも書簡(「書」)であることを明確にしている手法である

しかし、借用語や文化的代用を用いる時は、テキストの一貫性が損なわれる時がある。その場合は、その借用語や文化的代用の使用が、伝えたい概念をうまく伝達していない可能性がある。例えば、バハオラの名称として「祝福された美」、「古来の美」など、また、神の顕示者を意味する表現として「夜明けの地」、「曙」、「太陽」、「大海」などがあるが、これらの意味を理解していなければ、読者は何のことを話しているのかわからない。「わかりにくい」という現象の背景には、読者の背景知識を増やす必要性も含まれているのである。

聖典翻訳におけるコンピュータの活用

聖なる言葉を翻訳するのにコンピュータを用いるのは不適切と思われるかもしれない。結論を先に言えば、機械翻訳が翻訳現場で活躍できているのはせいぜい技術翻訳の分野くらいで、それでも、いわゆる翻訳援助を出来るだけで、最終的には人間による編集とチェックを要している。しかし、機械翻訳が技術翻訳である程度活躍できる理由は、前述の同等性を達成する確率がほかの分野より高いからである。つまり、文学作品とは異なり、文章構成に関する解釈が比較的少なく、技術用語の辞書があれば、訳語の検索が速いからである。

しかし、聖典翻訳にこれを応用できないことはない。つまり、たとえばバハオラの用いる語彙表現や文体をコンピュータに学習させ、それをもとに機械翻訳ソフトウェアを開発するというものである。たとえば、God, religion, Faith, faith, Manifestation, tabernacle, unity, oneness, Most Great Prison, Wronged One など頻繁に出てくる語句は訳語が概ね確立している。実際、バハイ用語辞典は既に発行されており、オンラインでも閲覧することができる。この辞書を翻訳ソフトウェアに搭載させれば、確立された用語の訳語は自動的にアウトプットされる。

また、God—exalted be He—のような表現もパターンとして学習させることができる。さらに、最近のソフトウェアでは、関係詞節のような日本語と語順が逆になるような構造を分析できるようになってきているので、従来は意味不明の翻訳であったものが、よりわかりやすくなってきている。このように、形状的・文体的な同等性は、コンピュータ技術の進歩である程度解決できるようになったと言えよう。また、意味的同等性でも、比較的機械的に対応する用語や概念であれば、コンピュータで解決できる。このように、コンピュータに翻訳のパターンを学習させて翻訳の援助をさせるものを翻訳支援ソフトというが、この分野は近年目覚ましく発

展してきている。しかし、意味的同等性の中でも解釈を要するものは、やはり人間の介入が必要であるし、動的同等性ともなれば、なおさらである。

この論考では、翻訳の機械化に関する考察をする紙面がないので、残りはコーパス学の応用に焦点をあててみることにする。コーパス(corpus)とは、自然言語の文章を構造化し大規模に集積したデータベースである。これを基に用語索引(concordance)を作り、さらに辞書が作成される。当然、現代ではコンピュータ利用が進み、電子化データとなった。これをバハイ聖典翻訳に適用するとどうなるかと言えば、バハイの聖典がどのように日本語訳されているかをコンピュータにより整理できる。日本語のバハイ用語辞典を作ることもできるし、同じ語句表現(たとえば「unity of God」など)が異なる書簡や訳者によりどのように訳されているかを表示することができる。守護者ショーギ・エフェンデイが、ペルシャ語及びアラビア語の聖典をどのように訳しているかを分析することができるし、さらには、英語からフランス語やスペイン語、中国語や韓国語へはどのように訳されているかを比較研究できる。

結論

バハイの聖典の日本語訳が「分かりにくいとされる」要因は、「日本語らしくない」ということと、「慣れない概念や用語が多い」ということに大きく分けられる。「日本語らしくない」ということ背景には、原文に忠実であることと、自然な日本語にするという常に存在する葛藤がある。これは、おそらくは永遠の課題である。英語から日本語に訳す場合、その言語的な差異により、100%自然な日本語にするためには、原文を「書き替える」という現象が生じうる。しかし、原文にないものを付け加えたり、あるいはあるものを省いたりすることは、わずかなレベルではあるものの、ある程度を超えてくると、「翻訳」ではなくなってくる。このジレンマをどう解決するかが鍵である。

「慣れない概念や用語」に関しては、読者として背景知識と理解を深めるという課題につながる。分かりやすくするために、ふんだんに注釈をつけることは、聖典という性質上、あまり好まれない。さもなくば、学術書・注釈書のようにになってしまうからである。特に、祈りの書のような場合は、唱え、暗記し、生活の一部にするわけであるからである。

翻訳学は非常に広範囲にわたる分野であり、ましてやバハイの聖典翻訳というテーマは奥が深い。したがって、この短い論考だけでバハイ聖典の翻訳の科学について語りきれものではない。今回の試みはあくまで、この膨大な研究テーマの基本部分を少し取り上げたにすぎないことをここに断っておく。

翻訳は原文のニュアンスを100%伝えられないことから、しばしば、「必要悪」として批判されてきた。実際、英語では「lost in translation」(翻訳による意味の喪失)というフレーズがあるほどである。しかし、翻訳のプロセスには、複雑な要素が関与しており、翻訳者は多岐にわたる事柄を考慮しながら訳を作りだしていく。その結果生じる翻訳は、原典を読むだけよりもさらに深い意味を得ることもありえる。実際、ショーギ・エフェンデイの聖典英訳は、この部類に属すると言われている。たとえば、ペルシャ語はその構造上、意味がいくつか取られる曖昧さを生じることがあるが、ショーギ・エフェンデイは、聖典を解釈するという守護者の機能

を活かし、英訳した時には原典では明らかでなかった意味が付与されることがあった (Ruhyyih Rabbani, 1988, p.86)。したがって、翻訳は、時間がかかり、自然さに欠けたり、誤訳という危険性もあったりするが、正しい方法で効果的に訳された時には、得られるものの方が、失われるものよりもはるかに多いと言えよう。

引用文献

- Baha'u'llah. *Summons to the Lord of Hosts*, available from
http://www.bahaijpn.com/library/baha/slh_e.htm
- Bell, R. T. (1991). *Translation and Translating*. London: Longman.
- Hervey, S., (1995). *Thinking Spanish Translation*. London:
Routledge.
- Newmark, P. (1982). *A Textbook of Translation*. Newyork:
Prentice Hall.
- Nida, E. (1964). *Towards a Science of Translating*. Leiden: E. J. Brill.
- Ruhyyih Rabbani (1988). *The Guardian of the Baha'i Faith*. London: Baha'i
Publishing Trust.
- Toury, G. (1995). *Descriptive Translation Studies and Beyond*. Amsterdam and
Philadelphia:
John Benjamins.
- Venuti, L. (1995). *The Translator's Invisibility*. London: Routledge.